収入保険で安心の経営を

農業経営には、自分で解決が難しいリスクが付きまとう。新型コロナの感染拡大による市場価格の低下のほか、大型台風や集中豪雨、いつ発生してもおかしくないと危惧される東海地震などの天変地異、さらには農業者個人の急な体調不良まで――どんなに頑張って農業を営んでいても、それは突然訪れてしまう。そんな中、さまざまなリスクの備えに「収入保険」を選択した東海4県の農業者を紹介する。

野菜、水稲

鈴木 康史さん　静岡県富士市

欲しかった補てん制度

【静岡支局】富士市でホウレンソウ3㌶とエダマメ2㌶、水稲4・5㌶を栽培する鈴木康史(やすふみ)さん(42)。若手農家で結成した「東部稲作研究会」に加入し、情報交換や卸先の開拓を進めるなど仲間と精力的に活動している。

鈴木さんは妥協せずに良いものを作りたいとの思いが強く、設備や良質な肥料への投資を惜しまない。ホウレンソウとエダマメの圃場には、高さ2㍍の鉄柵の上に電気柵を巡らせることで、獣害が一切なくなったという。

収入保険に加入した決め手を「露地栽培では、どんなにまじめにやってもそれが実らないことがある。この補償は自分の味方であり、不安を取り除くものだった」と話す鈴木さん。以前から減収を補償する保険があればと思っていたところ、収入保険制度ができるという情報を耳にした。担当のNOSAI職員には、「加入申請が始まったら一番に声を掛けてほしい」と伝え、制度開始とともに加入した。

今年は6月の長雨の影響でエダマメの収穫量が半分以下に落ち込むなど、過去最悪の収支見込みとなり、昨年に続きつなぎ融資を受けた。自分への支払実績について隠さず仲間に伝え、これまでに15人ほどに収入保険の良さを紹介し、加入を後押しした。

「実際に申請すると簡単だが、加入するまでに分かりづらいという印象があるのがもったいない。集団加入割引制度や、掛金が高くても今以上に補償割合の高いプランの創設など、今後も改善されていくことを望みます」と話す。(増井)

収入保険について「頑張った分が報われる制度だ」と話す鈴木さん